

月例研究会（2006年5月24日）

## IT化の進展と「仕事機会」の関係 ——「プロジェクト的な働き方」についての一考察

江頭 説子

### 本報告の目的

本研究は、プロジェクトに参加することにより仕事を経験する働き方（以下「プロジェクト的な働き方」とする）について、社会学的な視点からアプローチする方法論の確立をめざす研究の端緒となるものである。研究会では、予備的な調査から得られた知見について述べたうえで、今後の研究の方向性について提示した<sup>1)</sup>。なお研究会では、活発な議論がなされ、今後の研究の指針となるようなアドバイスを多く得ることができた。この場をかりて御礼を申し上げますとともに、本稿では、研究会での議論をふまえたうえでの内容となることをご了承いただきたい。

### 予備調査の結果

聴き取り調査を中心とする予備的な調査から、プロジェクト的な働き方をする人は、戦術として「技能」と「情報」を重視し、情報の受発信において、「電子ネットワーク」と「人的ネットワーク」を活用していることがあきらかになった。

### 予備調査から得られた知見

予備的な調査より、「ネットワーク」について検討を要することが浮き彫りとなった。そこで、朴（2003）のネットワークについての整理をもとに検討した結果<sup>2)</sup>、あらたな課題が抽出された。それは、プロジェクトが、組織の効率をあげるための仕組み（「戦略的ネットワーク」）なのか、自律的なユニットのつながり（「相互行為的ネットワーク」）なのかについてあきらかにすることである。仮に、プロジェクトが「戦略的ネットワーク」として位置づけられるのであれば、「プロジェクト的な働き方」は、有期的かつ不安定な働き方につながり、雇用保障、技能の継承や育成という点からみて、問題を孕むことが予想される。また、「相互行為的ネットワーク」として位置づけられるのであれば、「プロジェクト的な働き方」のなかから、自律的な働き方につながる要素を見出すことができるだろう。

### 今後の研究の方向性

今後の理論的課題として、プロジェクトについてネットワークの視点からの分析が有用であることから、ネットワークの概念についてより周到に吟味する必要がある。また理論の検討においては、社会関係資本等の視点からの可能性についても検討する余地がある。実証的課題として、プロジェクトを単位とした調査の積み重ねが残されている。

（えとう・せつこ 法政大学大原社会問題研究所

兼任研究員）

- (1) 研究会では、国際プロジェクトマネジメント学会が発行するPMBOK第3版（Project Management body of Knowledge：2004）を中心に、プロジェクトの定義、分類等について報告した。これらの定義等は、経営の立場から合理的目的のもとになされたものであり、働く側の視点から定義しなおす必要がある。
- (2) 「道具的ネットワーク」とは、道路・鉄道網、テレビ／ラジオ放送網、電話／コンピュータ通信網、LAN／VAN／WAN、インターネットなど、人々の関係形成やつながりのインフラとしての役目を果たすもの。「戦略的ネットワーク」と「相互行為的ネットワーク」は、人々のつながり、関係などをあらわすものであり、その違いは、主体のとらえ方にあるとする。つまり、「戦略的ネットワーク」は、効率を上げるための組織上の仕組みであり、「相互行為的ネットワーク」は、自律的なユニット同士が自由に繋がって広がっているネットワークとなる。